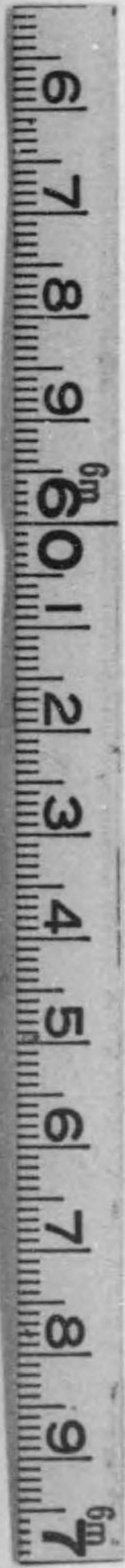


322

328



始





322

328

二學年用

# 塗工工作法

(蒔繪)

岡山工藝學校



第二學年用

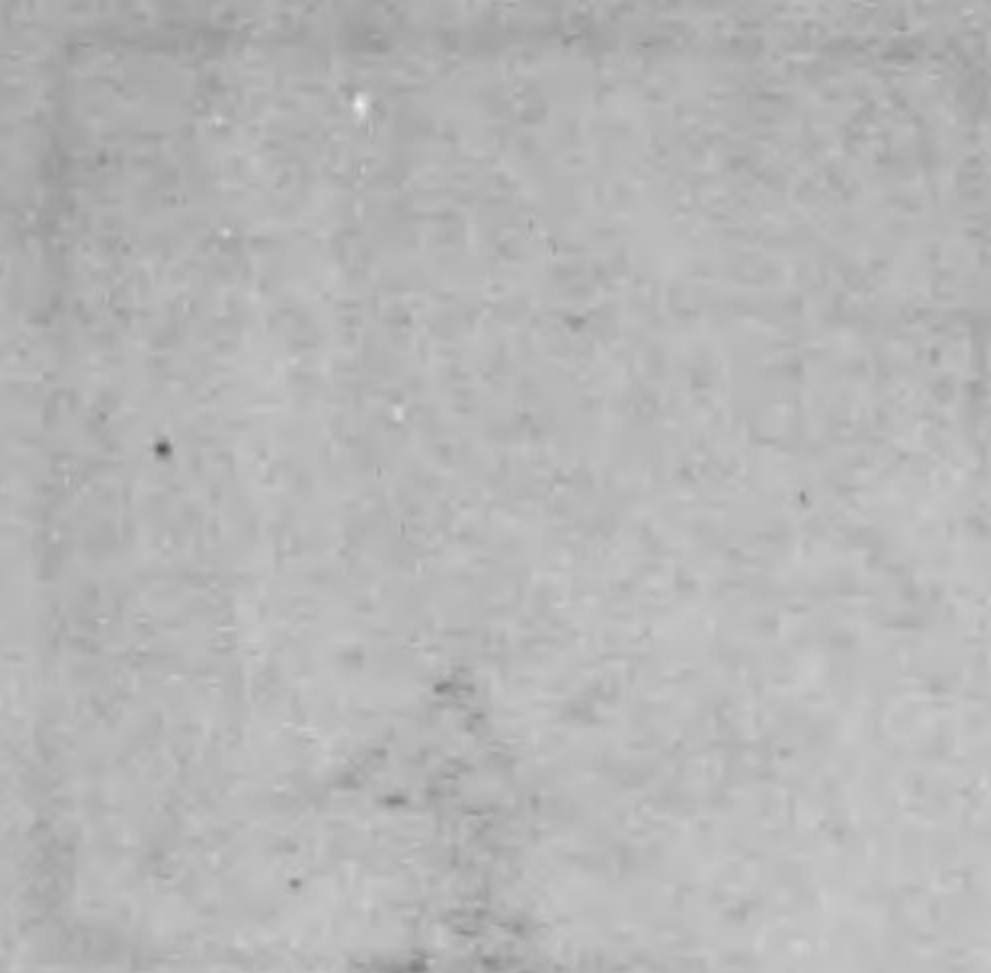
塗工工作法

(蒔)

繪)

大正  
11. 9. 21  
内交

岡山工藝學校



第二學年用

塗工工作法

岡山工藝學校





## 蒔 繪 (描金とも云ふ)

### (1) 蒔繪用道具

定盤……(一圖参照)漆塗りに用ゆると同様なれど、調繪用、調漆用、に使用し又蒔繪を描く際大なるものには机の代用をなす事もあれば塗師の用ゆるものより稍高く形は小形を宜敷とす粉盤……(二圖参照)粉盤は金銀粉を蒔く時使用する盤にて描金家諸道具中最も費用を要するものである、其形は各々好ある故一定せず、重ね箱に作るあり或は引出の如く爲すもあり、然し何れも中蓋ありて内部を蠟色艶消に塗置く、これは粉蒔の際盤中に散亂せる粉を掃き取るに易からしむる爲である、

風呂……漆塗りの際用ゆるものと同様である

緒口……(三圖参照)普通酒器に用ゆる盃にて蒔繪用漆を入るゝに使用するものである、なる可く底の扁平ならざるものを宜しとす、

研き鉢……(四圖参照)通常使用する井鉢の如きものにて糝漆下塗の如き時には研き桶を使用するも蒔繪の研物の場合には幾分か金銀末此内に残留する故陶器を撰ぶのである、スリカケ砥……(五圖参照)蒔繪物を研磨する際其炭類の面を平垣ならしむる爲めにすりかける砥石を云ふ、多くは白砥の面の平滑なる者を用ふ、

針砥……(六圖参照)白砥、青砥等にて作りたる細長き砥石である、高蒔繪のサビ研等に使用する小刀類……先丸 切出、缺等を要すれど、塗漆の部に説明せるを以て此處には省略す、角粉盤……油壺……薬研……等の諸品も又塗漆の部に説明せるを以て此處には省略す、



せいでん……此ものは普通の木綿布片にて、研出、梨子地研、呂色研等の研汁を洗ふに用ふるものである。

塗込刷毛……これは切出刷毛にて本通半通と稱するものと同様塗漆上塗刷毛と同様である、溜刷毛……(七圖參看)溜むとは凡て粉類を詩き付くため薄く斑なく地を一面に塗るを云ふのである、故に此溜刷毛を地溜刷毛とも云ふ下等品は馬毛にて作り中等品は狸毛にて作り、之を狸刷毛とも云ふ)上等品は兔毛、鼠毛、等にて作る。(之をウノ毛刷毛、ネジ刷毛とも云ひ總稱して粉溜刷毛とも云ふ)此種狐毛の者もありて甚だ好く使用に適す、  
籠……(八圖參看)主に鯨籠を用ふ、普通の檜製にても宜敷しウツギにて作れるもあり櫻製もあり兔に角詩繪用としては其尖能く撓み、耐久力強きを能しとす、鯨籠は置目を附するに最も宜し、

ならし盤……(九圖參照)五六寸より七八寸四方の最上等材を用ひ最も堅牢に下塗をなしサビ研に止め其上に二三回スリ漆をなし、堅めたる者である、平目粉、切金等を此上に散布し、基石、圖の如くツマミを附したるものを以てすりならすに用ふるものなれば、四方に僅かの引紐縁を附せしのみである、

鋸……(十圖參照)小さ鋸を用ふ、これ詩繪を研磨する炭類を細く切るに用ゆる者故、金切鋸最も宜敷し、  
やすり……(十一圖參照)これも亦炭切りに用ふる者なれば、平ヤスリを宜しとす、  
乳鉢……(十二圖參照)詩繪下に用ふる炭粉を作り又は繪具等を細末にするに用ふ、  
切金竹及かわらけ……(十三圖參照)竹の節なき所にて最も肉厚く古き者を選び、巾凡そ一寸長

六七寸位となし其上皮を取りて充分研磨し、之を墨汁にて染め置き金具を其上に當て薄き紙を其上に重ねコヨリにてくすり、切金を切るに用ふ、又かわらけは土の素焼にせるもの、内部を研き平らとなし墨汁を塗りて切金を入るゝに使用するものである、

大毛棒……(十四圖參照)詩繪を描く際用ふる塵拂ひである、馬の毛にて作れるもの多し、軸を紙にて巻き漆を塗りあり鳥の羽毛にて代用するものもあり、

粉詩毛棒……(十五圖參照)大中小數種ありて皆粉類を詩くに使用する、其最も小なるものを合シライ毛棒と稱し大なる者を下詩毛棒と云ふ、

粉詩筒……(十六圖參照)金銀類を散布するに用ふる者なれば、其數至つて多し、即ち粉の細荒に依りて各々適當の者を撰ぶ、軸は女竹の皮を去り極薄き肉を有するのみに作製されたるものを用ひ其小なるものは鶴等の大なる鳥の羽毛の軸を使用す、其一端は織物切れを用ふる者にて絹、紗、絹布、其細大に従つて撰擇する者である、

筆類……(十七圖參照)根朱と稱するは詩繪を描く上に於て最も貴重なる者にて鼠のイカリ毛を用ふ、脇毛と稱するは根朱の下等なるものにて鼠の横脇の毛を以て造れるものである、古來根朱は軸赤く脇毛は軸黒きを例とす、根朱は線書きに使用するものにて最も高價なるものである、尙ほ製造所に依りて名稱を異にせるものあれど、大体に於て異なる所なし、今、左に名稱及び使用ヶ所を擧げん、

根朱……先白根朱、味甚根朱、本根朱筆、脇毛筆、文廻し筆、(脇毛、文廻をのぞくの外は皆、毛を伸縮自在各自の好みに應じて作り、直し主に線書きに用ふるものである)  
胡麿毛地塗筆各種、黒軸丸筆、白軸印書、赤軸、上一丁各種(是等は皆、高詩、地塗等に



使用されるものにて上等蒔繪に於ては穂先を縮小し雜貨的安蒔繪に於ては幾分か永目になして使用するものである)

間軸細書、黄軸鶴書、赤黑白根朱替、(是等は線書に使用し「安蒔繪」上等蒔繪に於ては地ダミ等に毛を縮めて使用する)

高蒔繪筆、各種、(本筆は高蒔繪用の筆にて主に安蒔繪に使用されるものである)  
サビ筆、各種、(本筆も又サビ上げの際使用するものにて繪書用面相筆と全様のものである)

筆架……(十八圖参照)常に定盤の上に置きて筆類を架するに用ふ、多くは樫の木にて作る又金屬製のものもある、

筆洗……(十九圖参照)使用したる所の筆に附着せる漆を油壺にて洗ふ、其際此筆洗を以て漆をコキ出すものである水牛にて作れるもの多し、

瓜盤……(二十圖参照)西洋畫に於けるパレットと全性質のものにて常に左手の親指に是をかけた漆を此上に出して筆に附し調子をとるものである鼈甲、水牛、或は貝類を以て製造す、

ボウズ……(二十一圖参照)この稱呼は通稱にて其依つて來る處を知らず、吉野紙に砥粉を包み捻て作れるものにて下繪を付する時に使用する、

文廻し……(二十二圖参照)紋を描く際使用するものにて至つて舊式のものである、ツゲ、ウツギ、等のカンボクにて作る、

鯛牙……(二十三圖参照)鯛の牙を取り軸を付けし者である粉蒔の上なる凹孔等を研磨するに用ゐる者である、此外犬牙と稱するものあり、此者も鯛牙と同様のものにて稍や大なるの差異

あり犬の牙にて作りしものである、

絹篩……(二十四圖参照)炭粉其他の者を篩ひ別つに用ゆ、此外土地に依り人に依り、様々なる器具を作り種々なる名稱を附すれども通常の道具は大概以上述べし所と差異あるものにあらず、

## (2) 蒔繪用語

蒔繪には特別の用語あり、即ち漆のことについて云へるあり書く事塗る事について云へるあり蒔く事について、或は研ぎ磨く事についていへるあり、今左に簡単に説明せん、

(漆について)

赤ツケ………繪漆のことを稱して云ふ、

黒………は「ロセ」或は蠟色の事をいふ、

落合………高蒔漆落合ヒスラツとあがる事をいふ、

火取る(クルメル)………火にかけ水氣を去る事、定盤の上に延ばして火にかけて水分を取る

(書く事、塗る事)

ゴガキ………膠の入らざるゴフン或は石黄等の粉を水に解し器物に大体の模様を描き置く事  
置目………下繪の裏より焼漆或はゴフン等を以て輪廓をエドリ、器物に大体の模様を寫すと  
地書………粉を蒔く際、平蒔繪、高蒔繪の置目せしものを漆にて描く事、

細書(線書)………仕上げの際、或は研出しの際細き線を描くをいふ、

側書(カワガキ)………地書、線書と同じく只其輪廓を描く時のみにいふ、サビにてなすを

「サビカワガキ」と云ふ、



ダム……側書、地書、したるものを塗りつぶすをいふ、

書割……は、高蒔繪或は平蒔繪に於て者と者との界、草木の葉花等の脈を細く書きあける

ことを書割といふ、(此蒔繪の事を上繪といふものあり)

上繪地書……仕上の金粉を蒔く時に斯く稱す、故に書割の際には書割地書と稱す、

上繪下……金粉を蒔き仕上る際其準備として摸腦入の繪漆にて書割の所を薄く塗り加減を

とり金或は銀の消粉を蒔き「メヤス」即ち見當をつけるのである、

下ヅケ……同じくダム事なれど梨子地、平目等を蒔く廣き時に名付くべきものである、

筆ムラ……塗込みて筆のむらのあることをいふ、

刷毛目立ち……刷毛目立ちて平かならざることをいふ、

シブイ(シルイ)……漆のヤワラカなることをいふ、

込み……繪具を漆に入ることといふ、

焼る……漆の乾き早く乾き過ぎたるをいふ、

サシ……ツクロイをなすことをいふ、

(蒔く事)

(S) 下蒔……高蒔する前の上げかたにて繪漆にてだみ下蒔粉なる炭粉を蒔く事である、

綿蒔……綿蒔とは金銀消粉を綿又は真綿にて蒔くをいふ、

筒蒔……筒蒔とは粉筒の中に金銀粉を入れて蒔くことをいふ、

アイシライ……とは字の如く金銀粉をアイシラツてボカス事である、

詰め……多く平目或は梨子地若しくは荒き金銀粉を蒔く時に稱するものにて濃く蒔き詰め

る事をいふ、

蒔詰めは濃蒔、中蒔、淡蒔の三段あり、

覆せ(アビセ)……書割の(上繪)高蒔一体に溜みつぶし(塗りつぶす)て金銀粉を蒔く法をい

ふ、粉は細かなるを用ふ、

イサリ……主に草木の葉等に行はるゝ法にて脈を線書きし其間を書割り荒粉を蒔く仕方で

ある、

掃除……金銀粉の粉くずを掃寄る事をいふ、

半段……金粉の名稱にて平極と消粉とを等分に混合したるものをいふ、

朱黒……は朱と炭粉とを混じたる色粉をいふ、

金黒、銀黒……金粉に炭粉を入れ或は銀粉に炭粉を入れたるものをいふ、

摺……主に生漆を摺込時、に用ゆる言葉にて、金粉固め若しくは艶ツケの時にするもので

ある、

色付……塗物の光澤を出す時に用ゆる言葉である、

生摺……生漆を以て摺堅め若しくは摺る事をいふ、

延摺……樟腦にて生漆を薄く延したるものにて摺故、斯く稱するものである、

水延摺……草ヅリともいふ、水にて生漆を延ばし摺る故斯く稱するのである、

胴摺……呂色塗第一回摺漆を落す際稱する言葉にて通常油砥粉にて炭足を消しキメを細か

になすものである、

摺重ね……生漆或は梨子地漆を二度、三度と摺り重ねる事をいふ主に仕立梨子地の際行は



る、  
〔研磨く事〕

研……………炭にて研ぐ事

磨……………蒔繪を磨きて光澤を出す事をいふ

仕立……………炭にて研ぐことにて丸粉に、行はるゝものである、

荒押……………荒く研ぐ事をいふ、

仕上……………仕立上げ、即ち出来上る事をいふ、

平研ぎ(研出)……………蒔繪の研方にて研出蒔繪の事をいふ、

研消……………研ぎて其端を消すをいふ

ドエル……………蒔繪仕損じ研過ぎはげたる事をいふ、

〔仕方、製作の事〕

シヤクリ……………彫りスクツ事、

彫込、ハメ込……………塗物を彫り其中に嵌入する事である、

立切……………刀にて断ち切る事をいふ、金貝、地金等を切斷する際用ひらるゝ言葉

ナラシ……………切金を細かく切りし際、切口不規則に立つ故、それを平らかにす仕方をいふ

〔風呂について〕

風呂……………漆を乾燥せしめんとする戸棚若くは箱をいふ、

蓋を切る……………風呂非常に濕りたる時蓋を少し開き置く事をいふ、

イタメル……………風呂の中に稍や僅か入れて漆を少し乾かす事をいふ、

數物或は安蒔繪の時なすものである、

空風呂……………濕めさぶる風呂の事、

〔器物について〕

合口……………香合の如く蓋と身と能く合ひたるものにて外見蓋と身一直線をなすものをいふ、

立上……………身に立上りし所をいふ、

勝手……………身の側面の事、

身入……………身の中の事を一体に稱す、

見返し……………蓋裏をいふ、

甲……………蓋の上をいふ即ち蓋の表、

チリ……………蓋表の端の平らなる所、

胴張……………器物の胴の張りたるものをいふ、

鏡……………膳等の上部即ち廣き中央部をいふ、

三味線胴……………三味線の如く胴の張りしものをいふ、

(3) 蒔繪の種類

付書蒔繪……………とは細き線書にて蒔繪したるものをいふ、

平蒔繪……………極扁平に蒔繪したるものにて肉高からずして塗面より稍高さものをいふ、(線な

らずして平らなるもの)

研出蒔繪……………塗と一様に研出したるものにて少しの高さもなきものをいふ、

高蒔繪……………高く盛り上げたる蒔繪である、肉の度により中高、本高等の區別がある、



黒蒔繪……蒔繪の総てが黒く、然して高蒔繪したるものをいふ、黒は臘色漆にて高蒔繪するのである、

研切蒔繪……金、銀、錫、四分一、等の粉地に蒔繪を研出したるものをいふ、墨繪の研出多し、金銀等の粉を研切り繪模様を出顯せしむるを以て斯く名付けたるものである、

肉取高蒔繪……肉取りを精密になし、前高蒔繪より稍や密なるものをいふ、

鏽上蒔繪……高蒔繪、より一層高く肉取りしたるものにて漆鏽を用ひて、高蒔繪したるものである、

菱合蒔繪……鏽上——高——研出——等、一切の蒔繪を混用したるものにて蒔繪の最も精巧なるものである、

定付蒔繪(キメツケ)……高蒔繪下地の上に薄金貝を被せたるものをいふ、

木地蒔繪……木地の上に直ちに蒔繪したるものにて堅木等の如く摺練せしものゝ上になすと白木の上に蒔繪するとの二様あり、

梨子地……種々の仕方あり、

詰梨子地——濃梨子地とも云ふ、濃く梨子地鈿を蒔き詰たるを云ふ、

中梨子地——詰梨子地より稍や薄く蒔きたるものをいふ、

薄梨子地——極薄く梨子地鈿を蒔き詰たるをいふ、

村梨子地——所々に斑に蒔きたるものをいふ、

玉梨子地——玉の如く圓く梨子地鈿を蒔きたるものを云ふ、但し七、五、三、に蒔くを法とす、

霞梨子地——霞の如く蒔きし梨子地を云ふ、

鹿の子梨子地——鹿の斑の如く焼金の大きな平目粉を蒔散し、其上に一体に梨子地粉を濃く蒔き詰めたるものである、

刑部梨子地——梨子地中最も上等にて尊ばるゝものである、金も厚く多量を要し、粉も大なるものにて重ね置きて仕立上るものである、

平目地……平目地は蒔方により名稱を異にす、即ち常蒔、中蒔、の三種にして、他に置平目と稱する法がある、大一、大二、大三、の厚き平目粉を置き詰めたるものである、

粉地……粉地とは粉を一面に蒔き詰め仕上たるものにて、金地、小判地、銀地、四分一地(銀四分一と錫四分一との二様あり)半段地、平極地、消鈿地、の種類がある、此外別に常地と稱する事あり、これは、常粉を蒔きしものを云ふ、

螺鈿……鮑、夜光貝、の二種を多く用ふ、夜光は前者より品位あり元、不減貝と稱せしものである、使用法は嵌入を粘付との二法あり嵌入は厚く粘付は薄きを使用し殊に現時彫刻して嵌入する、精巧のものをも出すに至つたのである此外に錫、鉛、陶器、玉、石、珊瑚等を用ひしものもある、錫、鉛、鮑、等は多く光琳風に用ひられ、陶器、玉、石、等は破笠風に多く用ひらるゝものである、玉、珊瑚は多く古器物に使用される、

此外青銅地、朱銅地、鉄鏽地、石地、石目地、蒔朱地、等は塗部に述べたるを以て畧す、城ヶ端蒔繪……は富山縣城ヶ端に出來しものにて密陀油(密陀僧)を以て描きしものである、安蒔繪……雜貨的安蒔繪とも稱す、平蒔繪、高一蒔繪、トシノ、鏽、の三法を土台として消粉を蒔き仕上げたるものである、



## (4) 蒔繪用調漆法

蒔繪専用の漆は繪漆、高蒔繪漆、ロセ漆、焼漆、入り漆、沃懸漆等である、

繪漆……セシメ漆(技漆)若しくは生正味漆(邊漆)の定盤の表面に出し炭火又は日光に晒し之を攪拌する時は漸次其水分蒸發して茶褐色を呈す、然して其全く褐色となれるを度とし之に辨柄(凡そ漆量の二分一を度とす)を混じ充分練りたるものを吉野紙を二枚重ねて濾すこと二三回に及び之を猪口に入れ美濃紙を圓形に切りたるものにて掩ひ貯ふ、(此蓋紙は漆液に密着せしむるを要す若し間隙あるときは其部分より漸次乾燥するの憂がある)又往々繪漆を作るとき生漆中に梨子地漆を二三歩の割合に混入するものあれども其必要を認めず、二、三十年位経過せし上等の生正味漆にて作れば線書き等の場合に於て最も成績宜しと云ふ、要するに古きもの宜敷理ならん、

(注意) 初め生漆を火に炙り水分を取るに際し夏時は空氣の濕潤せる時なれば、漆の乾固早きが故になるべく充分に焼き冬時空氣の冷却して乾燥せるときは乾き遅きが故に焼方を稍や扣へ置く必要がある、

高蒔繪漆……蠟色漆を定盤上に出し火に炙し二三回攪拌し其漆の二分一計り油煙を混じて充分に練り吉野紙にて濾し貯ふこと繪漆と同様である、又地色に依りては、僅少の紅殻を混入して淡褐色に作ることもある、又幾分の唐の土を混和する人あれども、この唐土を入るゝは結果面白からざるものである、

ロセ漆……ロセとはセシメ漆の水分を蒸發し去りしものに臘色漆を混和せしものにて、其混合の量は使途に應じて稍や差異あれど、概ね等分を度とす、これ又一二回濾して貯ふ、

研出蒔繪の鈴入下附等に用ゆ、密に粉を蒔く所の下附には、繪漆を使用す其他切金置き、下附、等ロセ漆を使用さるゝ事多々あり、

焼漆……焼漆とは繪漆を焼きたるものにて、通常紙片の一端より捻り一部を残し其残せる部分に繪漆少量を載せ之を火上に炙り其泡立つを見て止む、又附木の一端に繪漆を載せて焼き作るものもある、此ものは漆永久乾燥せざるものなる故に置目紙の繪を描くに用ゆ、入り漆……入り漆は又上繪下漆とも稱す、繪漆少量の中に樟腦少量を加へ充分練り一回位濾したる後緒口に入れ蓋紙を掩ひ貯ふものにて書割又は重り目等に使用さるゝものである、延漆……延漆は生正味漆に少量の樟腦を加へ稀釋したるものにて、鈴固め或は艶附的擦漆に用ふるものである、

沃懸漆……繪漆中少量の蠟色漆を加へ褐色ならしめしものを云ふ、但し地方に依りては漆商の手にて作り賣却せるものがある是等は大抵生漆を水にて練り恰も水飴の如くなせしもの或は速干漆と稱し會津地方にて製せらるゝ特別のものもある、

## 蒔繪製作法

蒔繪も塗漆法と同じく叮嚀に且つ精巧なる方法と劣等にて簡易なる手技法との種別あれど、先づ此處には上等なる即ち正確なる製作方法を述べ、然る後工業的なる雜貨的安蒔繪の製作法を記さんと欲するのである、

## (5) 下繪寫シ方

總て蒔繪下繪は豫め罌水引薄美濃紙若しくはガシ紙に描き置き之を描かんと欲する器物面に寫すものである、而して移寫するに二法あり、即ちゴガキ取方、漆書法にて各之を置目取と稱



するのである、

一 ゴガキ取方……繪模様を記せる下繪紙の裏面を基石或は猪牙チヨガ又は圓滑なる陶器類の外  
部等にて充分研磨し滑澤ならしめ、然る後、砥粉、石黄、白粉、唐の土、等の如きものを  
水に溶解せしめ面相筆に少しつゝ付け畫の裏面より可成細き漆にてナヅリ、其乾ける時之  
を取りて蒔繪すべき塗漆面に置き上より鯨篋若くは下地刷毛の如きものにて擦る時は極め  
て美しく描きたる繪様の形跡を漆面に留むるものである、  
又物によりては、面相筆に白粉類の溶液を付けたるものにて直ちに器物に下繪を描く事も  
ある、此際は焼漆にてナヅリ下繪紙に寫し取り置目取方は、此處に記せし何れにても器物  
に寫し得るのである、之を單にゴアタリと稱す、

二 漆置目取方……下繪紙を滑澤ならしむることは前全様に裏面より焼漆をネジ筆につ  
け前ゴガキ取りと同様にナヅリ、同様の方法を以て漆器面に附着せしむる時は、焼漆の畫  
紋形跡を印す、其上にボウズを打ち、後、拂毛捧にて拂ふ時は白粉附着して明かに模様を  
認め得るものである、

八 (此際注意すべきは、ゴガキ取方、漆置目取法何れを問はず、置目は極めて細く見當をつ  
け得る位の程度とせざれば、仕上、美しからざるものである、)

以上の如くして下繪既に終れば、即ち蒔繪を描く準備全くなりたるものである、故に、次に蒔  
繪の作法を説明すべし、

(6) 付書蒔繪

第一置目……(説明前出)

第二線書……これを描くには、左手親指に爪盤を懸け繪漆少許を其内に置き根朱筆に之れ  
をつけて置目に表はれたる輪郭を上よりエドリ描くものである、筆の持方は右手小指の端  
を漉敷又は澁染を以て巻き指脂の附着を防ぐ、薬指は屈して掌につけ他の三指を以て筆を  
持ち描くものである、

(注意 尙ほ蒔繪筆を使用する時には筆に含まるゝ處の油を充分に取去るを要す)

第三粉蒔……漆描終れば所定の鈴類を合ひしらひ毛捧を以て蒔きつく、鈴抹はなるべく細  
かきを要す通常毛打細メを用ふれども極頭迄は使用することを得るものである、(細き鈴  
は磨き易き爲めである)

第四延摺……生摺……鈴蒔終れば直ちに乾燥せしむ即ち一晝夜陰室に入れ置き充分乾燥  
するを待ち延漆を古綿につけて摺る時は漆は鈴中に滲入して鈴を一層堅牢に附着せしむ、  
杉原紙、奉書紙、若くは上質の半紙を能くもみ此漆を充分拭ひ取る然る後一晝日陰室に入  
れ角粉にて能く油研し、再び生漆を摺り前法を行ひ乾燥せしむ、この二度目の際は乾燥後  
余り永く陰室に入るべからず研磨勞多くして効少きを以てある、

第五、鈴磨き……凡そ一晝日を経て陰室より取出し上引砥を角粉盤上に小刀を以て引き  
(削り)落し茶碗を以てつぶし細粉となし其粉を指頭につけ燈油(種油)の少量をつけつゝ叮  
嚀に磨擦して仕上るものである、

此付書蒔繪に於て注意すべき点は、始め線書の際使用する繪漆は成るべく古き正味生漆を以て  
調製したるものを使用し、殊に線を引捨し部分は、なるべく磨擦をさげねばならぬ、

(7) 平蒔繪作法



平蒔繪とは其名の如く肉を盛り上げざる蒔繪の總稱にて、最も簡易なる蒔繪である。

第一 下繪付け……………(説明前出)

第二 地書き……………地書きとは、金銀粉を蒔かん爲めに繪漆にて描くを云ふのである、之を描くには根朱筆を右手に持ち左手親指に爪盤を掛け其中に繪漆少々計りを出し之をつけて初めに繪の輪郭を描き次で適宜の地塗筆を以て其中の塗る可き部分をムラなく極薄めに塗るものである、然して其地書をなす際指頭に存する脂氣漆面に附着し漆の乾燥を妨ぐるを豫防する爲右手小指の先きにコシガラを巻きつけ此小指を木素面に當てて支柱とし筆の先を定めて漆を撫りつけて書くものである、上圖(一)は線書き、(二)は地塗りしたるを示すものである「地書きをなす際(一)圖の如く葉筋を描くを書割といふのである即ち出來得る限り細き間隙にて二本の平行線を描き其間隙外を地塗りすれば茲に一の空線を形づくるものにて右と左に書き割る儀である、葉の裏、重り目、等に行はるゝ方法である、

第三 粉蒔き……………右の如くして全部塗り終らば、金銀粉末を蒔く若し花葉等色を各別にせんど欲せば、毎に各別々に粉蒔をなさねばならぬ、例へば花を銀にて仕上んには、先づ花を塗り直に銀粉を蒔き而して後葉を塗り之に焼金若くは小判(青金)粉を蒔くが如きを云ふのである、

(金粉を蒔く際には地書きを最も薄くし銀粉を蒔く際には稍や厚くなさねばならぬ、然して粉蒔きは充分粉を出して一氣に蒔かざれば失敗するもの故注意すべし、)

第四 ノベズリ……………粉蒔終らば直ちに陰室に入れ、一晝夜の後取出し(充分風呂を濡す必要あり)延漆とてセシメ漆に樟腦少許を加へ練り一回濾したるものを古綿の塵芥なきものに

浸して其畫面全体に擦り付け其上を天狗帖、若くは杉原紙の如き純楮紙を綿の如く揉みたるものにて充分拭ひ去り再び陰室に納む

第五 生ズリ……………一晝夜を経て又取出し蠟色色付仕上の如く角粉にて軽く油磨きをなし面に残りし漆を悉く去り再び生漆を古綿にて薄く擦りつけ軟き前全様の紙にて充分拭ひ去る

第六 研ぎ(仕立とも云ふ)……………生ズリせしものを陰室に入ること一晝夜にて取り出し椿炭を細き線状に切りたるもの(針砥の形に切りしもの)を以て紙の揉みたるものにて拭ひつゝ炭に水を附着して緩やかに研き畫面を平滑ならしめ、其紙にて充分磨くのである

第七 スリ込……………右終らば(最も炭研ぎの際研破る恐ある故細心の注意を要するのである、然して最も熟練したる技術を要するのである)又生漆にて一面に擦る事前生ズリと同様になし陰室に入る、

第八 引砥磨き……………右一晝夜の後、風呂より取出し、上引砥を角粉盤上に削り落し、之を茶碗の外側、或は小刀にて充分磨擦して細末としたるものを指頭に付け種油と唾液少々つゝをつけつゝ叮嚀に磨き滑澤に且つ光輝を放つに至りて止む、

第九 毛打……………磨き終らば直ちに毛打を爲すものである、毛打とは、書割の反對にて一本の極めて細き線にて描く法にて凡て花葉の蓋、筋、若くは鳥獸の毛書き等を描くものにて線書き終らば直ちに細微なる鈴を蒔きつくるものである、

鈴は毛打極、細メ極、並極、等隨時適宜である、上圖は書割にせず毛打にて仕上げたるを示すものである(加賀地方にては毛打を筋書といふ毛打は毛打書毛書の畧)

第十 毛打すり……………毛打終り一晝夜陰室に入れ置きたる後、ノベズリをなし能く拭ひ去り又



陰室に入る、

第十一、一回磨き……右一日を経たる後上引砥を細末し、其ものにて軽く油磨きす（此際烈しく磨けば、毛打を磨き落す恐れある故特に注意せねばならぬ）

第十二、二回擦り……再度生漆若くは水ノベズリを施し充分拭ひ去り陰室に納む、（水ノベとは生漆に水を入れたるものである）

第十三、磨き色付上り……右三四時間の後、時々注意して擦り漆の乾燥せしや否やを検し其全く乾りしを伺ひ直ちに取り出し蠟色仕上の時と同じく角粉にて（全面を）油磨きし其光輝燦爛たるを度として止むものである、

（注意）……凡て漆筆は油につけ筆洗にて叮嚀に漆を洗ひ去り残漆なからしめて納め置かねばならぬ、之と反對に蒔繪筆を使用する時には油を充分繪漆にて洗ひ落して然る後所要の漆を附着使用せねばならぬ、

#### (8) 下毛打法（平蒔繪の一種）

下毛打法も亦平蒔繪の一種にて仕上線書即ち毛打を正確になさん爲め下に毛打を爲し置き最終に再び上毛打をなし書き起すものである、

第一、線書……繪漆を以て諸線を描く、  
下繪つけは、前法全様にて繪漆を以て下繪置目に準據して根朱筆を以て線書、全部を描く（但し線書のみにて仕上る處は此際描かざるものとす）

（一圖は線書を示す、

第二、粉蒔……極味甚粉を蒔く、此蒔きたる粉は仕上後は見へざるもの故現今は粉の代

りに炭粉、若くは繪の具等を蒔くものである、然して風呂に入れ一晝夜充分乾燥せしむるのである、

第三、溜み潰し……右乾燥せしものを風呂より出し畫面の全体を繪漆にて塗り潰す、之を塗るには地塗筆を用ひ、細き部分は根朱ガハリ筆を用ふ、此際ムラなく極薄く塗る事等は前に述べたると全様である、前圖二は溜み潰せるものを示す

第四、粉蒔よりすり漆仕上（即ち研き）迄は前平蒔繪と同様、

毛打は初め線書したる上に再び線書を入れ不足の所も亦書足す、毛打終りすり漆磨上げは前法と同じ（三圖は仕上りたるもの）

#### (9) 研出蒔繪製作法、

研出蒔繪とは線書、地書、粉蒔、色塗等の蒔繪を施せしものを全部塗漆し去り乾燥せしめし後之を研ぎて繪紋様を顯出せしむる方法である、單に之を平研蒔繪とも云ふ  
又本法と同様にして然らざる研切り蒔繪と稱する作法あれど、稍や其趣を異にせる故、混同せざる様注意するを要す、

始め研出蒔繪を施さんとするには、蠟色中塗を極めて平坦に研ぎ少しにても高低なき様準備せねばならぬ、若し、然らざれば蒔繪を研ぎ出す際研ぎ破る恐れあるを以てどある殊に中途研ぎ面は光澤あらざるを肝要とす、若し光澤ある時は其上に塗抹すべき漆液の附着力誠に弱く失敗の因をなすものである、研出蒔繪にも細部に至りては種々の方法行はるゝものなるも大体に於て次に記す法と異なる所なきものである、只金銀粉末を蒔く處へ乾漆粉を蒔き或は粉の上に色漆を塗る等種々考案して工人各々其技を發揮するものである、



第一、置目(即ち下繪寫し)……説明前出、  
 第二、地書き粉蒔き……地書きは前平蒔繪と同様である、然し總平研と稱し研出のみにて畫の全体を顯はさんと欲する場合には第一に毛打全部をなし置き、然る後地書きを行はねばならぬ、而して地書きも淡蒔すべき所若しくは濃淡を施すべき個所等あれば其部分をばロセ漆にて描き置かねばならぬ、  
 例へば黒蠟色地に紅葉を研出せんと欲せば第一圖の如く先づ線書すべき部分を繪漆にて描き、其上に鈴を蒔付け一日乾し次日淡蒔すべき個所をロセ漆にて塗り、第二圖の如く粉蒔きす、  
 研出しに用ふる鈴は凡て微塵以上のものを用ふる、然して繪漆にて描きたる細線等濃く描くべき處は並微塵、若しくは荒微塵を毛棒にて蒔きつけ、荒極等の細かなる粉を蒔き込み置くのである、淡蒔となすべき個所はロセ漆にてなるべく薄く塗り之れに金銀小判等の花粉を粉蒔筒にて適宜の濃度に蒔き合はすのである、  
 若し研出蒔繪の周圍一面の地面に平目の如き粉を以て地蒔をなさんとせば、其地蒔粉の細粗に應じて繪に蒔くべき粉を違へねばならぬ、如何となれば、若し其蒔きたる粉に厚薄の差異甚しきときは、研出す時に必ず一方の厚き方先づ充分に露出するに至るも一方の薄き方は尙ほ充分顯出せざるものである、然して此等を悉く露出せしめんとせば、他方は粉磨滅し剝脱するに至るの憂あるものである、  
 故に地蒔を平目の常三となせば繪の線書を花粉若しくは荒微塵にて厚く描き、淡蒔の部を並常粉位を用ひ、又小二平目の地蒔をなせば、線書を微塵とし、淡蒔に花粉を用ゆれば罷し

始め地に平目を蒔かんと欲せば右等の割合を考へ豫め蒔くべき平目を定め置き、然して繪蒔終りしものを乾かしたる後其蒔くべき地をロセ漆にて可成薄く塗り之に適宜の濃淡を付け筒にて蒔き付け陰室に入れ乾すものである、  
 第三、固め……既に乾けば之を取出し生漆を少々づゝ指頭につけたるものにて全体の畫面に薄く打ちつけ乾かす、又延漆にて筆にて地蒔の散るを防ぐ爲め薄く塗り天工状と稱する紙にて押へ延漆を吸ひ取り風呂に入れて乾かすものあり、これ又一面、塗込の際附着せる粉末の抜け取るを防ぐ爲である、  
 第四、塗込……右乾燥せば蠟色漆若しくは梨子地漆其他の色漆等にて自己の欲する色の漆液を以て其畫を描ける全面を塗り風呂に入る、此際ムラなき様注意すること必要である、一度縮みを生ずれば、最早取返しはつかざるものとなるものである、  
 第五、荒押……右風呂にて乾燥せしむること三四日若しくは五六日に及び、其全く乾固せるとき之を取出し朴炭の一方を切り其面を砥石にて研き平坦ならしめたるものにて荒増之を研磨する、之を研くには處々に僅かの畫紋を顯出するを以て度とする、其炭の作り方は上圖に示すごとく作るものである、然して現今にては、朴炭の代りに毒荏炭を使用するもの多し、  
 第六、二回塗り……第一回塗込にて充分、研ぎふされば宜敷けれど、大抵の場合尙ほ數多の小孔を存するものなるが故に其際は第一回塗の時に用ひたると同様の漆液を全面に塗り陰室に入る、  
 第七、研上……右風呂に入れしものは充分乾かす必要あるを以て二三日間放置し、然る後



取出し前と同じく朴炭にて研ぎ金粉顯れ出し頃椿炭にて研ぎ、然る後蠟色炭にて緻密に其面を研ぎ荒き炭足なき様せねばならぬ、研炭を使用する際には研ぐべき炭の面は時々スリカケ砥の平面に於て擦り合せ常に其面の平坦なるものを用ひ且つ柔軟なる乾きたる綿布或は能くシボリたる布にて拭ひつゝ研磨せねばならぬ、

第八、第一回スリ漆……右研き終れば、炭粉胴擦と稱して充分細末なる炭粉を指頭若しくは綿布類に附したるものにて磨き其上に生漆を以てスリ漆をなし風呂に入れ乾かす、  
(此前人により綿ズリと稱し生漆を古綿にて摺放し風呂に入れ、然る後、研上げをなすものもある)

第九、第一回磨き色付……右一日を經過せしものを砥粉胴擦と稱し砥粉と角粉を等分に加へ細末とせるものを綿布に附着せしめて油磨きをなす、

第十、第二回スリ漆……第二回スリ漆をなす、此際は第一回より薄き様充分生漆を拭き取る

第十一、第二回磨き……角粉にて油磨きをなす、

第十二、第三回摺漆……第二回スリ漆より以上に生漆を充分ふき取り置く、

第十三、第三回磨き仕上り……第二回と同様角粉にて磨く、此際若し充分澤付仕上らざる際には、尙ほ水延漆にて摺漆して翌日磨けば充分美しく色付き上るものである、此法を草摺といふ、

以上の如き方法にて普通平研蒔繪と全く完成さるゝものである、然し畫様に依り濃淡の蒔方により尙ほ數回の手数を要するものもあれど、夫れは只粉蒔をなすこと數回を加ふるのみなる故、以上の方法にて充分推知し得るものである

(10) 研切蒔繪製作法、

本法は墨色畫を金地面若しくは銀地面錫地面或は四分一地面に顯出せしむる者にて其製作法は何れも同一にして只だ蒔くべき粉異なるのみである、左に銀地仕上のものに就て詳述せん、但し下塗は前研出と同く蠟色澤消若しくは中塗研立等を用ふ、  
今前圖第一の如き竹を畫とせば、下繪即ち置目を所要の器物面に附し次に第二に示すが如く、其墨書きの部をロセ漆にて塗り椿炭の細末を蒔き次て点書の部に漸次粉蒔するものである、

粉蒔をなすに先ち椿炭の細末を取り、之に銀(金地なれば金粉)並極粉を混じ、以て欲する所の淡墨色二三種を作り置き之れ等を其色に應じて適宜に散布するものである(此際椿炭の代りに各種色乾漆粉を使用しても宜し)斯くして後陰室に納め乾かす、  
右一日を經て陰室より取出し描きたる部を除き其他の地面全体をロセ漆にて斑なく塗り之れに銀並極(金地なれば金並極)を蒔きつけ之を陰室に納れて一晝日を経過せしむ(此際塗込のロセ漆は金最も薄く銀之に次ぎ錫粉に至りては相當厚く塗らざれば失敗するものである)

右乾燥せるとき其全面を延漆にて殆んど拭ひ付る如く薄く塗り天工帖を以て押へて延漆をとり、次ぎに乾燥後、生漆にて摺漆し充分拭きとり、一二日を経た充分乾燥後、椿炭にて細かに研ぎ炭の細末若しくは上引砥等にて磨き色上をなすのである、研上より仕上迄の順序、方法は平研出蒔繪と同様なれば之れを畧す、

本法に於て總て墨畫の濃淡多きときは従つて蒔方に於て多くの手數と困難を生ずるものに



して墨繪研切は殊に其点に於て甚しきものである、  
(11) 高蒔繪製作法、

通常高蒔繪と稱する者は、下蒔高蒔繪と呼べる下蒔一回高蒔漆書一回丈にて肉を盛り上げたるものを意味する者なれど、下蒔二回入れたるものにも時としては亦同様に呼ぶことあり、然し大抵は此等を中高と稱す、然し人に依りては別に高蒔繪漆を作らずして下蒔の上に呂色漆を塗り込み數回之を繰り返して盛上をなすものもあり何れを可何れを非と稱するを得ざれども何れも夫れの特長を有するものである、此外最も肉高きものにサビ上高蒔繪と稱するものあり、劣等雜貨品に用ふる高蒔には高一(高蒔漆一回書)若しくはト  
ン／＼サビ高蒔繪等あり、此處には左に中高蒔(地蒔ある)の製作順序を記さん、  
但切蒔ある中高蒔なる故、下塗は呂色研ぎにて艶消し器物を使用するものである、

第一、置目……………前同様

第二、細書……………置目既に成れば繪漆を以て其高蒔繪となすべき畫の全体を細く書き之に銀極微塵粉若しくは銀細微塵粉を蒔き付け而して後陰室に入れて乾かす、之を細書と稱す(圖第一は漆にて細書せるものを示す)

第三、地蒔……………右の如くして一晝日の後之を陰室より取り出し其畫紋のある所を除き置き其余の地面を悉くロセ漆にて成る可く薄く塗り之に平目若しくは金銀の粉末を適宜に散布して陰室に入る、(第二圖參看)

第四、塗込……………右乾燥せる後其全面を呂色漆若しくは梨子漆にて通常塗漆せるときに如く(三)に塗り込む

第五、荒押し……………表面の繪土を蒔繪第六、二回塗……………

第七、仕立……………高蒔繪を研下……………第八、一回すり漆……………

第九、どうすり……………水を入れた蒔繪第十、二回すり……………蒔繪を研下……………以上は平研出蒔繪の法に依り仕上るものにて茲に至り初めて地蒔、蠟色中に銀の線書畫を現出せるのである、(註)手鏡を蒔繪の置目に對し、頭を以て蒔繪十二寸高入りの鏡に對し、

第十二、下蒔入れ……………二回磨き色付終らば右畫紋全体を繪漆にて斑なく塗り之に炭粉を蒔き付く、(註)下蒔入れは、蒔繪の置目に對し、頭を以て蒔繪十二寸高入りの鏡に對し、

第十三、下蒔すり……………右一日陰室中に乾したる者を生漆にて擦漆する、第十四、下蒔研ぎ……………右乾燥せば、朴炭の極細少なる者にて金銀蒔の上研きをなすと同様に研ぐものである、

第十五、高蒔漆書き……………高蒔繪漆を以て右研ぎたる上に描くのである、之を描く際繪の極細密なる部分は平坦に塗抹し其他は總て花葉の重り目、若しくは葉等をも針先にて彫り染たる如く間隙を置き描くのである、之を書き割と稱す、

此高蒔繪漆にて模様を描く際は殊に普通の漆書きよりは稍や高く盛り上ぐる者である、第十六、高蒔研ぎ……………右描き終らば陰室に納むること兩三日にて之を研ぎ、前下蒔研ぎと同じ、

第十七、すり漆……………右終れば充分磨き之に擦漆をなし陰室に入れて乾かす、(註)研ぎ、第十八、磨き及上繪下入……………右一日を経て取出し角粉にて磨きたる後入り漆にて最も薄



く書割の部分塗り、十四五分間陰室に入れ置き時々注意して之を取り出して息氣を吐し試に其塗りたる處に少しづつ息氣を受けて曇の見ゆるを度とし之に消粉を真綿につけて拭ひ付け、然る後に陰室に納め入る(第四圖參看)

第十九、地書き……上繪下乾燥せば地書きを始む。地書とは即ち粉蒔下地にて繪漆を用ひ、上繪下をば針尖大に書き割り其他の部分は總て塗る者である。

第二十、粉蒔き……

第二十一、のべすり……

第二十二、磨き生すり……

第二十三、研(仕立)……

第二十四、すり漆……

第二十五、磨き……

第二十六、毛打ち……

第二十七、毛打のべすり込……

第二十八、磨き……

第二十九、二回すり……

第三十、磨き仕上げ……

右粉蒔きより以下磨き仕上げ迄の作法は、平蒔繪の仕上と異なる所なき故其説明を省略す、尙ほ一層高き肉の蒔繪を作らんと欲せば、下蒔入を二三回重ねれば宜し、又臘色の無地に高蒔を施すには第十一迄の手數を減じ置目採りより直ちに第十二下蒔入より始むれば宜し、(12) さび上高蒔繪製作法、下蒔二回若しくは、三回入れたる高蒔繪にて満足せず尙ほ一層高肉の蒔繪を製作せむとする時は繪下を鋪(砥粉に水を入れ生漆にて練りたるもの漆塗の部に委しく記せり)にて盛り上をなす、之を鋪上高蒔繪と稱す、今左に蠟色仕上りの表面に鋪上高蒔繪を施すべき順序を記さん

第一、置目……(説明前出)

第二、がわ書き(即ち輪郭)……かわ書きの前に下蒔入れを行ふものあり、之を畧して直ちに側書をなすものあり、何れにても宜し下蒔入れを行ふものはこの側書を畧して直ちに鋪側書をなすものである、即ち此側書は、繪の下地を明にし鋪の喰附を良くなすものにて繪漆を以て繪の輪郭を太き線にて描き之に炭粉を蒔き、然して陰室に納め乾かすものである。

第三、鋪側書……(下蒔入をなせしものは之を單に側書と云ふ)

右乾燥せし後、其輪郭の上に添ふて再び筆に鋪をつけ輪郭書をなす。

第四、鋪付……鋪揚げとも云ふ一日位を置き充分乾きたる時、前輪郭内繪全体を鋪にて塗り翌日再び同様に鋪を塗り重ね自己の欲する高さに達する迄鋪を盛り上げるのである

第五、鋪研……鋪全く乾固せるとき針砥にて研ぎ適宜に肉の高低を付る。

第六、鋪塗……鋪研ぎ全く終りて後、其畫紋全体をロセ漆にて塗抹し(筆にてなす)鋪膚を細滑にする。

この鋪塗を膚直しと稱し、次の第七、第八、を畧し直ちに高蒔漆塗消と稱し、高蒔漆にて盛り上げ殊に此塗消しと稱するは、低くかるべき所は筆にて漸次薄く即ち低く塗るのである然して此塗消は一回乃至三回位に及び、其都度朴炭にて研ぎ、所望の肉取りとなすのである、然して擦漆、角粉磨をなし地書に移り平蒔繪の工程に依り仕上る

第七、研ぎ……右一晝夜の後風呂より取出し朴炭の細少なるものにて研ぎて凹凸なからしむ。



第八、下蒔入れ……此下蒔入は前述の高蒔繪法第十二回目に相當するものにて之より以下仕上に至る迄の順序は全く同一なる故茲に説明を省略す、

(13) しゝやい研出蒔繪製作法、しゝやい研出蒔繪は又菱合蒔繪とも稱し高蒔繪と研出蒔繪とを結合したる製作法なる故其製作法複雑にて作者の手續を要すること頗る多く又心を勞すること最も深く且つ困難なること一方ならねば其出来上りたる者は従つて一種の妙所あるものである、  
諸てしゝやい研出と云へるは例へば、水の流れの中に岩石ある如き圖に於て其水中に在る所は通常の研出蒔繪の如く製作し、其水面上に現はるゝ部分を普通高蒔繪の如くし、然して其研出の部分と高蒔繪の部分とを同時に描き且つ同時に金銀粉を散布して又同時に研出したる者である、即ち肉合ある研出し蒔繪である、蓋し名稱の起原亦茲に存する者ならん此製作法は既記の如く中々困難なれば、是を悉く了解せしめ得べく記載する事は難事である、茲には最も簡單なる肉合研出蒔繪の順序を記述し其一般を示さんとす、これ理の存する所は總てに通じて同一なる故此方法を了解して更に熟思工夫せば複雑なる者なりとも、敢て難事ならずと思考す、今左の波に岩を描くものにつきて説明せん、

- 此蒔繪は、呂色中塗研を行ひし上に施すのである
- 第一、置目……説明前出
- 第二、細書き及びがわ書き……圖中高蒔繪となすべき部分即ち第一圖に於ける松の如き部分は鏝にて細書きを入れ、地の肉合とすべき箇所は総て炭粉にて輪郭書をなし置く
- 第三、さび上げ……此圖中岩は尤も高肉とすべき處なる故前に述べたるサビ上げ高蒔繪

の法により適宜、サビにて肉付をなす、但し岩石の水に入る處及び其重りたる處は其肉を漸次に塗り消し置く(第二圖參觀)此サビ付をなすには回数の規定なき故、只、其肉合の自己の意に愜ふ迄行ひて止むものである、

- (注意)此圖に於て水際の消し工合に於て殊に叮嚀に研ぎ消し置かざれば結果悪し、
- 第四、はだ塗り……さび上高蒔繪の法に依りサビ研を了れば、其面を一層緻密ならしむる爲にロセ漆を塗る、
- 第五、研ぎ……右一日陰室に入れ乾固せば取出して朴炭にて研ぐ、
- 第六、下蒔き入れ……右研ぎ終れば、岩石の重なる處及び、水際を消し込む様繪塗にて塗り、下蒔即ち炭粉を蒔き付くる者である、又波頭は僅かの肉を保たしむる爲め同時に繪塗にて波頭より塗り消し、亦炭粉を蒔き付く(第三圖は炭粉を蒔きたるを示す)
- 第七、すり漆……右一晝夜を経て陰室より出し生漆にてスリ漆をなし又乾かす
- 第八、研ぎ……朴炭にて研ぐ、
- 第九、高蒔繪漆書き……之を施すには消し口に注意して描く、
- 第十、同研ぎ……陰室に入れ置くこと二三日にて之を取り出し朴炭若しくは、蠟色椿等の炭を切りたる者にて最も叮嚀に研ぎ消し口と地板との境界をして凹凸ならしむ、研ぎ終れば、スリ漆をなし一回色付をなす、
- 第十一、切金置き……切金を置かざる者は直ちに粉蒔の用意をなす、然して切金置きをなすむとせば、此處にてなすを正當とする、其切金を置くには其置くべき箇所を梨子地漆にセシメ漆を少しく混合せる者若しくは梨子地漆のみにて或はロセ漆にて少々づゝ薄



く塗り(之を下付けと云ふ)其上に一ヶづづ附着せしむる者である、即ち豫め切り貯へたる切金皿を出し細く削りたるカン木揚枝の一端を尖らし、其尖端を舌にて濡らし、切金一つづづを附し其置くべき箇所、即ち塗漆したる部分に順次に附着せしむ、然して之を附着するには或は規則正しく或は亂雜に列べ、各濃淡ある様になす、乃ち濃き所には密に淡き所には粗に列ぶ但し粗なるに従つて漸次に細少なる片を用ゆ、

附着し終らば直ちにガンビ紙片を以て其上を蔽ひ、紙端を指にて押し、之を動かざる様にし、扱て切金を蔽へる部分を切出刷毛の先若しくは、篋の最良なる者にて叮嚀に擦ること兩三回に及ぶ、斯くすれば、切金は全く地面に附着して其間隙より喰み出づる漆は紙に附着す、然して其溜りありし漆全く紙に附着し取り終らば、直ちに陰室に入れて乾燥せしむ(第四圖は切金を置きたるものを示す)又此切金置に際し、一直線に並べんと欲する時は、根朱筆に固めのロセ漆をつけ引き置き、其上へ切金を置き能く押へ乾燥後、切金と切金の間より喰み出たる漆を小刀を以て掃除する、

第十二、磨き及び上繪下入……右凡そ一週日を経て取出し指頭に炭粉の細末なるもの少々と唾液少々づづを着けて軽く磨擦す、これは切金の間及其周圍等に附着せる下付け漆を除去する者にて、なるべく切金の列と同一方向に摩擦して剝落せざる様注意せねばならぬ、

(此際磨きをなす前朴炭を以て切金の上を荒研ぎするものありこれ剝脱するものは、此際剝脱し尙ほ仕上の際、非常に速に研ぎ得て結果宜敷ものである)

斯くして間隙の漆悉く除去せば、切出刷毛に水を付け軽く其上を洗ふて汚物を去り、水分

の乾くを待ちて書割をなすべき處に上繪下を入るゝことは、前高蒔繪に於けると同様である、

第十三、粉蒔き……金銀粉蒔きの際、濃淡を附し或は色の取合せをなすには、繪紋中最も前なる部分に屬する箇所より一部分づづロセ漆にて極薄く描き蒔き始む、例へば第五圖の如く、イ部より順次に蒔く者である、

(圖に於て岩の如き全部金か或は他の粉を蒔きつめボカヌものには、上圖の如く書割をなすものである、此際の上繪下は巾余り廣からざる様注意せねばならぬ)粉は微塵以上を用ひ粉蒔筒にて散布する、其切金ある部分に散布する者は、切金の厚薄に應せねばならぬ、即ち切金中根朱なれば、粉は味甚を用ひ、切金本根朱なれば花粉を用ひる、若し之をあやまれば、切金と粉の厚薄一定せざる故充分なる仕上をなすこと能はず若し又平目の如き荒き粉を蒔き込むべき箇所あるときは、該平目は粉蒔の前に散布し置き直ちに其上に粉を蒔きつくるものである、又肉合の中に平研出しの書を交へ現はさんどせば、此粉蒔の前に其部分を描き置き其後一晝夜間乾燥せしめて粉蒔に取掛るものである、

第十四、一回塗り込み……粉蒔き終りし後一日間陰室に乾かしたる後、塗込す、之を塗るには地塗筆を用ひて其濃く粉蒔せる部分をノベ漆にて薄く塗り其淡く粉蒔せる處をロセ漆のノベ漆(樟腦少々を入れたるもの)若しくは蠟色漆のノベにて薄く塗り消す、

第十五、荒仕立……右數日間陰室に入れ乾かしたる後取り出して朴炭にて大体を研ぐ第十六、二回塗り……第一回塗り込みと同様なるも粉蒔きあらざる即ち無地の處は臘色漆にて普通の厚さに塗り込むものである、



第十七、仕立上げ……充分乾燥せし後朴炭、椿炭、呂色炭等を以て充分研上げ炭粉にて一面に炭足を消し置く、  
 第十八、一回すり漆……之れより以下第廿一迄は平研出法と同様なれば説明は畧す、  
 第十九、同磨き色付……  
 第二十、同磨き色上げ……  
 茲に至りて畫面未だ完からざれど其肉合の研出せる所は終了す、即ち肉合ある岩及波紋等は顯出せられたのである、然して是より以後は最初に細書したる松と波の線のみなれば、松樹は普通の高蒔繪の作法に依り製作し波線は付書として仕上るのである、即ち其順序は次の如くである説明は畧す、  
 第廿二、松下蒔入……  
 第廿三、スリ漆……  
 第廿四、同研き(即仕立)……  
 第廿五、高蒔繪漆書き……  
 第廿六、同研き……  
 第廿七、上繪下入……  
 第廿八、粉蒔き……  
 第廿九、スリ漆……  
 第三十、仕立(波線も共に描く)……  
 第卅一、スリ漆……  
 第卅二、磨き色付……  
 第卅三、毛打(波線も共に描く)……  
 第卅四、ノベズリ……  
 第卅五、磨き……  
 第卅六、生ズリ……  
 第卅七、磨き仕上……  
 (第六圖は仕上りたるものを示す)  
 以上記述せる蒔繪製作法の内、平蒔繪、高蒔繪、研出蒔繪、肉合蒔繪の四法は、此他各種蒔繪の元をなすものにて、製作されたるものゝ千状萬態なるは僅かに材料の使ひ方に差異あるのみである、即ち右四法の範圍を基として起りたる者にて、この法を能く了解し

(14) 黒蒔繪製作法、

て他のものと對照比較せば、解釋は容易にて尙ほ數多の別種類を案出することをも得るのである、次ぎに黒蒔繪、色蒔繪、木地蒔繪、其他數種の方法を記さんとす、對比して考ふべきである、  
 第一、置目……説明前出、  
 第二、下蒔入……説明前出、  
 第三、同スリ漆……説明前出、  
 第四、同研キ……説明前出、  
 第五、蠟色漆一回書キ……繪漆にて粉下の地書若しくは高蒔繪漆書きをなす如く蠟色漆を充分濾し、其者にて叮嚀に描くものである、  
 第六、同研キ……  
 第七、蠟色漆二回書キ……  
 第八、同研キ……二回目研ぎは最も鄭重なること必要である、然して炭粉の細末にて磨き置く、  
 第九、スリ漆……  
 第十、ドウズリ……  
 第十一、二回スリ漆……  
 第十二、同磨キ色付……  
 第十三、三回スリ漆……  
 第十四、同磨キ色付仕上……  
 第十五、毛打……色付終れば矢張蠟色漆にて毛打をなし然して乾かす、毛打乾燥せば全く出來上りたるものである、又工人に依り右下蒔入をなさずして蠟色漆書きを二回若しく



は三回書き重ねて仕上るものあれど、是等は適宜たるべきものである、又高蒔繪の金銀粉を散布する代りに炭粉を蒔きて黒蒔繪を作ることもある、即ち、烏若しくは燕等の如き者を描く時は多く此法に依りて製作する、通常これを炭蒔繪と稱す、然し此炭蒔繪よりは眞に黒蒔繪の面目を備へ而も通常黒蒔繪と稱するは蠟色漆繪を指すものである、

(15) 木地蒔繪製作法、

塗漆を施さざる木地面に蒔繪を施したるを木地蒔繪と稱するのである、其作法に二種あり即ち一は木地にスリ漆を施して後蒔繪する者、其他は是を施さず直ちに蒔繪する者である既にスリ漆を施したる木地なれば、蒔繪の製作は塗漆したるものと同一方法にて宜敷く只其木地面に荒き木目あるものなれば、之を填充せむが爲めに下蒔入を爲す手数を一二回多く重ねるか若しくは一二回サビ付をなして其面を研き目止をなして後蒔繪を施すかの相違あるのみである、

然しスリ漆を爲さざる白木地面に蒔繪をなむとするには右と大に異なるものである、何となれば、單に左の如く製作するときは、木地必ず汚穢して遂に如何ともすべからざるに至るものなるが故であるされば此場合には左の手数を重ねよばならぬ、

第一、金貝張り……器物の全体を先づ錫の金貝(二貫附き以上)を以て張り包む、糊はゼラチンを使用す、

第二、置目立ち切り……金貝張り終らば其上に畫紋の下繪を附け然して其畫紋を切り抜く、之を切るには立ち切り小刀の充分研ぎたるものを以てなす、

第三、さびしごき込み……右切りたる個所に槍篋(ツケ篋)を以てサビを薄く擦り込みて

乾かす斯くすること二回に及ぶ、

第四、さび拂ひ……右乾燥したる後青砥にて其上を平坦に磨き、サビをして畫紋を填充し金貝と同じ厚さならしめ然して後スリ漆をなして乾燥せしめる、

第五、下蒔入……(以下高蒔仕上と同様なれば省略す)

毛打悉く仕上り蒔繪の手順全く終るを待て金貝を悉く取り去り其地面に残れる糊を拭ひ去る斯くの如くして全く其事を終る者である、

此白木地蒔繪製作に於て金貝張りの上にドーサ引美濃糊數枚を麩糊にて粘附しサビ附終り生乾きの際其一枚をメクリ研ぎて又一枚、を取り去り終に錫金貝に至りて高蒔の工程に入る方法を採るものもある、肉を高く盛上げ仕事を易くする上に於て有効である、

(16) 色蒔繪及び色漆畫製作法、

色蒔繪とは色乾漆及繪具を以て金銀粉に代用せしむるものにて、色漆畫とは諸種の色漆を以て描きしものを云ふ、

其製作法は、凡て金銀粉末を使用すると同様なれば殊更説明する必要なきものである、其色研出蒔繪をなすには、凡て乾漆を用ひ、色平蒔色高蒔繪等には多く繪具を用ゐる、これ繪具は粉末細微なる故研出すること不可能である故である、

又平蒔、研出、高蒔とも其花葉畫紋に金銀粉を濃淡蒔とし其上を色漆にて塗り然して後、研ぎ仕上を爲し畫紋をして金銀と漆色とに依りて濃淡あらしむるものがある、之亦蒔繪の一種にて其製作法は別に異なる点なし然し唯一部分に於て各研出法を行ひ紋章繪模様等に應用さるのみである、



## (17) 梨子地製作法、

梨子地とは其塗りたる面が、梨子の外皮に似たる斑文を顯す故に斯く呼び做されたるものである、然して、これが製作に用ふべき金銀粉は大小精粗の階段頗る多きことは既に材料に於て述べたるが如くなれど其製作法は縦合粉の種類を異にするとも異なる處なきものである、只た散布すべき場所の廣大なる者には荒き粉を使用し其狭小なる者には細かきを用ふ、是れ其斑文をして其器物に適應せしむべく慮りてある、

梨子地粉の蒔方には數種ありて濃蒔き梨子地(又つめ梨子地とも云ふ)中蒔梨子地(別名中つめ梨子地或は中梨子地)淡梨子地、村梨子地(又玉村梨子地)等其外種々の名稱あれど(材料學參看)此等は其蒔、べき金銀の多少と蒔方の濃淡とによりて名付けたるものである、濃梨子地……凡て梨子地を蒔くには中蒔研立若しくは蠟色艶消の面に施すのである、濃梨子地を蒔くには、繪漆(稍や辨柄の込みを少くしタルメを前目になし調合せしもの)を以て平坦に塗り此表面一体に梨子粉を蒔く(粉は金銀何れも同作法)例へば大三(粉の名稱)を蒔かむと思へば、先づ全面に充分蒔き付け、其終りし時直ちに常三(粉の名稱)を取り再び全面に散布し間隙なからしむるものである、(總て何粉に限らず濃梨子地には細大の二粉を漸次に散布して最小の間隙だも無からしむることは此順序の如くせねばならぬ)斯くして後直ちに陰室に納め二晝一夜を經過し其全く乾燥せしとき之を取出し粉を拂ひ切出刷毛に少し梨子地漆を附し僅かに漆濕を得たるを度として其粉の表面を一方面に撫で付く、これを通常ノハケを使用すと云ふ、斯くて再び陰室に納むること一晝夜にて又取り出して梨子地漆にて全体を厚薄なき様に塗附して亦陰室に入る、此際陰室は濕氣を加へずして一晝夜を過

し、後僅かに濕氣を與へ、次日又更に濕潤せしむること僅少斯くて漸次に多く濕氣を與へて乾燥の度を強め、凡そ一週間余日を経せしむ、右の如くして全く乾けば取出して朴炭にて荒研きを爲し、再び梨子地漆にて薄く塗り、陰室に納むること二三日にて後、色に斑なき様充分に注意して朴及び蠟色炭等にて研ぎ砥粉ドウズリをなしスリ漆を數回なし磨き仕上るものである、其方法呂色塗仕上と同様である、

【注意】梨子地は金銀の何れを問はず、其粉少しも塗漆面上に顯出せざる様仕上るを緊要なることとする、

中梨子地及淡梨子地……中蒔は濃蒔より稍淡く、淡蒔は中蒔よりは又稍や淡く粉蒔を爲す者である、然して此等の梨子地を蒔くには、其下付漆は殊にロセ漆を用ひ、ノバケを用せずして直ちに梨子地漆を塗る者である(荒細二様の粉は使用せず)

此塗込以下色付迄の製作順序は濃梨子地と同様である、  
玉村梨子地……中梨子地と同様である只粉蒔きの時玉の如き叢ある様にするの差異あるのみである、

以上述べたる如く梨子地なる者は、蒔きたる粉末の上に薄く漆膜を蒙むれる者なれば、金粉末を散布するも或は銀粉末を用ゆるも仕上りたる後は一見差異なきが如くである、故に近來、中等以下の物品に於ける梨子地は大抵は銀粉を使用し甚しきに至つては錫粉を以て代用する者もある、是を俗に市兵衛梨子地と稱し其製作法の如きも、下付漆の塗りを薄くし梨子地粉を蒔き、梨子地漆を薄く塗り研ぎ塗立梨子地漆を塗立て仕上るものもある甚しきに至りては、澁を引き其乾かざるに錫梨子地粉を蒔き乾後、木賊を當て生漆をシゴキ朱合漆



等の透漆を塗り仕上る最も安價なる方法を行ふものもある、上等ものにも往々金梨子地粉に銀梨子地粉或は錫梨子地粉を混じて金梨子地なりと瞞着せむとする者もありて時には其道にある専門家にも判別に苦しむこともあるものである、以上の外に種々の梨子地あれども大抵は粉の蒔き様に依つて名付けたる者にて製作法に於ては異なる所なきものである、

## (18) 平目地製作法、

平目粉を蒔きてなれる地を稱す、此者も亦梨子地と同様、濃蒔、淡蒔、中蒔等の別及び置平目地と稱する者がある、

○濃蒔平目地……下地は梨子地と同様である、

第一、蒔込み……下付漆として繪漆の緩き者にて塗り其表面一体に充分濃密に平目粉を蒔き付けて陰室に入る、

第二、固め……右二晝夜を経て取出し梨子地漆のノベ若しくはセシメ漆を指頭に少しづつ、附して蒔付け有る粉の上を軽く打ち固めて再び陰室に納め入る(此際ダミ刷毛にて極めて薄く塗り固むるものもある)

第三、塗り込……右一日を過し梨子地漆を以て全面を塗抹し數日間緩く乾かす、

第四、荒研き及仕上げ……荒研きをなし再び薄く塗り其乾くを待つて研ぎ上げ若し小孔ある時は尙ほ幾回にても塗り且つ研き其表面全く平滑なるに至り漸次艶付を爲すこと梨子地仕上と同様である、

○中蒔及淡蒔平目地……これも濃蒔の仕上法と左程異ならず、只下付漆にロセ漆を用ひ

塗漆に蠟色漆を用ゆるの差あるのみである、但し場合に依りては塗込漆に同じく梨子地漆を用ゆる事もある、

○置き平目地……此者には、なる可く荒き平目を用ふ、通常小三以下は置平目に使用せぬものである、置平目とは平目粉を一粒づつ並列して地面をなせる者をいひ、之を置くには、切金置きと同方法である、然して置き終らば陰室にて乾かし其上に數回梨子地漆を塗り仕上をなす事は、蒔平目と同様である、

梨子地と平目地とは既に其粉の性質甚だ異なる者である、即ち梨子地は甚だ薄く平目粉は相當の厚みを有するものである、然して其仕上りたる後の現象も亦差異あり即ち梨子地は粉末上に薄き漆膜を蒙り、平目は漆の表面に其粉の一端を露出せるものである、

## (19) 金地及銀地製作法、

金地銀地と稱するは、金粉蒔地、銀粉蒔地と稱すると同一にて又之を金溜み地とも云ふ、

金銀地を作る順序は次の如くである、

第一、地溜……金銀粉を蒔くべき場所全面を繪漆にて平かに塗る、之を塗るには地溜刷毛を用ゆ、

第二、粉蒔……金銀其他何粉にても微塵以下を散布するには粉蒔毛棒を用ひ夫以上の荒き粉は粉蒔筒を以て蒔く、若し平目打込地を爲さむとするには、先づ平目を適宜に散布し置き其上に粉蒔きをなす、但し此時は平目と粉の厚さを比較して等差なき様せればならぬ

第三、塗込……此塗込はヌリ漆の代りになす者なればノベ漆を用ひ、拭ふが如く薄く塗る、最も荒き粉の上は、蠟色ノベ漆を塗る、



第四、荒仕立……………

第五、スリ漆……………

第六、仕立……………粉末荒き者は茲には中仕立に止め今一回スリ漆をなして後仕上るを宜し  
とす、

第七、スリ漆……………

第八、磨き色付け……………

(20) 金銀淡蒔及中蒔地製作法、

金地及び銀地の稍淡く蒔きたるものを中蒔と稱し尙一層淡く蒔ける者を淡蒔地と云ふ、中蒔及び淡蒔は其製作法は平日地淡蒔と同様である、但し粉末は微塵以上を用ゆる者である

(21) 四分一地製作法、

四分一地とは其地色四分一の金屬に似たる故に名づけたるものにて其粉末は銀粉に炭粉を混じ適宜に色合を作りて散布する者である、此粉末を銀黒と稱す概ね微塵以下を用ふ其製作法は金銀溜地を作ると同様である、又錫四分一と稱する者あり、これ銀粉に代ふるに錫粉を以てせしものにて製作法は異なる處なきものである只錫粉は荒きものと細きものとを篩ひ分け其荒きものを使用せねばならぬ、

(22) 安蒔繪製作法、

総て蒔繪は其使用の目的を有する物品を使用し耐へ得る程度に應じて夫れ相當の蒔繪を施さねばならぬ、此に於て工業的方面より材料及び手数を減じ其仕上り外形を上等品に擬せしむべき安價なる安蒔繪の必要をこり案外此方面の進歩の發達を來せるものである、此安蒔繪は製作者互に競争して手數材料の減少を計畫せるもの故一定の説明を加へ難き点あり即ち其使用する漆の如き或は金粉の如き又其調合法の如き、材料の製造所により又各

工人に依り皆異なるものにて何れも各自の方法を以て或は尙ほ夫れ以上に日々研究劃策せるものである、去れど大体に於ては差異非らざるものである、されど案外此方面に秘法とも稱すべき点多々あり實際について常に留意して會得すべきである、

安蒔繪も同じく平蒔繪、高蒔繪の別ありて其製作上にも亦各上中下の等差あるものである彼の會津、静岡、黒江等に盛に製造さるる所の蒔繪は大抵此中等以下に屬する者である、然して平蒔に平極磨き、半ダン、消磨き、消蒔立等の名目ありて高蒔繪に高一若しくはトシ／＼サビ等の名あり、

安蒔繪に用ふる繪漆は、総て樟腦を加へ緩和ならしむ、これ容易に薄く塗抹すべきが爲にて若し漆余りに粘く其塗抹厚ければ、散布すべき粉末多くして且つ表面粗糲となる恐あるものである、

其調漆法の如きも工人に依り各異り尙ほ又、其名稱をも異にするものである、本安蒔繪は會津若松を以て最も進歩せる、産地と稱し得べきものにて、今其調漆の一を記さん  
安蒔繪に使用する漆の調合法は先づ顔料をカンブル油にて練り、然して所定の漆と調合するものである、今左に其分量を記さん

光漆……………早乾漆 三匁、 箔下漆 三匁、 石黄 四匁、

(濕氣多き時は約半分位焼くか、或は乾かざる漆を入れる) (東京高野の箔下漆)

繪漆……………早乾漆 六匁、 生漆 四匁、 辨柄 二匁、

(濕氣多き時は約半分位焼くか、或は乾かざる漆を入れる)

干漆……………(高蒔漆とも云ふ) 蠟色漆 十匁、 辨柄 三匁、



樟腦若干、(唐土を入れる事もある、半分位焼く事もある)

白漆……………中透木地呂五匁、水酸化蒼鉛五匁、

黒漆……………箔下漆十匁、油煙四匁、

朱漆……………朱合漆五匁、朱粉五匁、

黄漆……………朱合漆十匁、石黄約二分ノ一カンプル若干、

青漆……………赤呂色漆十匁、練青漆七匁、石黄三匁、カンプル若干

辨柄漆……………朱合漆十匁、辨柄八匁、

鼠漆……………早乾漆十匁、石黄油煙各等分

銀漆……………立梨子地漆十匁、錫粉七匁、

透漆……………(呂セ漆とも云ふなり)早干漆、呂色漆、全量 樟腦若干、

之れを使用する金消粉の如きも會津にては特種のもを調製使用するのである

(一) 平極及半段蒔繪製作法

第一、置目……………

第二、地書……………樟腦にて緩くのべたる繪漆にて成るべく薄く描き暫時陰室に入れ置く、

第三、粉蒔……………右陰室に入る後、時々注意して出し試み其少しく繪漆の變色せるを見

て平極粉若しくは半段粉を真綿に附けて蒔きつく、(東の光、ゆふ極、燒貫上々、青上々等)

第四、ノベズリ……………右陰室にて乾燥せしむること一晝日の後緩きノベ漆、即ちヒロノ

べと稱せらるるものを綿布に付け拭ひ付け柔軟なる紙にて充分拭き取り陰室に入れて乾

かす

第五、ミガキ……………右一日の後取出し、引砥若しくは角粉にて油を付けつゝ軽く指頭にて

第六、毛打……………

第七、ノベズリ……………

第八、磨き仕上げ……………

(二) 消粉蒔繪製作法

平蒔粉若しくは半ダン粉を蒔くものより一層薄く繪漆にて描き陰室に入ると事も亦稍長くし

て其塗漆面に吐息を試み少しづつ曇りを見るを程度として真綿にて消粉を蒔きて乾燥する

時は即ち仕上りたるものである、

又近來粉を散布するに鹿革の至極柔軟なる者を用ひて蒔きつゝ擦り磨きて光澤を出すもの

もある、會津地方に最も多く行はるゝ法である

右等の方法に依りてなれる者は、正確なる蒔繪法に據りて仕上げられたる者より一層光澤

を保つ故、製作法の如何を知らざる者は却つて此等の物品を悦ぶものあり、然し此蒔繪は

直ちに剝落見るに堪えざるに至るものである、

(三) 高一蒔繪作法

高一とは高蒔漆書一回と云へるを畧して唱へ來れる名である、其製作法は簡單なるものに

て次の如くである、

第一、高蒔漆書き……………干漆を使用す或は呂色漆及上花漆を等分に加し(但し塗立即ち上

花のみを用ふるものもある)之に其量半ば以上の唐土及樟腦少しを混じ善く練り合せ充



分濾したるものを以て盛り上ぐ。

第二、粉蒔を仕上り……右高蒔繪漆書を終らば之を陰室に入れ其乾くを待ち然る後其上へ(一)及(二)の方法を行ふて仕上ぐるものである

尙ほ光漆を以て高蒔漆書をなさば、此際陰室中にて吐息を受くるを待ち前述の如く絹綿若しくは鹿革にて半ダン粉又は消粉等を蒔きつけて乾燥せしめ夫れ／＼の仕上法を行ふものである

(四) トン／＼サビ上げ高蒔繪作法

前述の如く総てサビ付をなすには篋若しくは刷毛を用ふるを常とすれど、此方法は、サビ上をなさんと欲する處にサビを溜めトン／＼と打ち動かして融流平坦ならしむる者である故に斯く稱せしものである、此法に使用するサビは一時に多量作り壺中に納め久しく貯へ置くを宜しとす、故に當業者は概して是を床下に貯へ居れるものである、

第一、置目……

第二、輪郭書き……サビ上げを爲すべき部分の輪郭を高蒔繪漆にて線太に描き乾かす

第三、サビ溜め上げ……右輪郭乾けば貯へ置けるサビ(砥粉を漆のみにて固く練りボロ／＼したる者)を出して水を加へ融和ならしめ之を面相筆につけ輪郭書きの内がわを太く線書し其未だ乾かざる間にサジの如きものにて其中に適宜の量を計りサビを溜め込み左手に其器物を持ち右手にて軽く其側面を打ち動かし其溜めたるサビの流動平坦なるに至りて止む、斯くして乾ける者は其面平滑にて殆んど研磨せる者の如くである、

第四、サビ塗及フシ拂ひ……右乾けば、其上をロセ漆にて薄く塗り陰室に乾かす事一晝

一夜にて其表面に小ブシある處を炭にて研ぎ去る

第五、高蒔繪漆書き……高一に用ゐし高蒔繪漆にて描き乾かす

第六、仕立……仕立とても通常の如く研ぐにあらず、只節ある箇所を除去するのみ

第七、アビセ地書……通常の地書は書割をなすものなるが、安蒔繪にては、大概アビセ地書と稱し書割をなさず只一面に入り漆(安蒔繪用繪漆)にて薄く塗る者である

第八、粉蒔き……粉蒔以下仕上迄は前述せる安平蒔及高一等に同じければ之を省畧す、

(23) 石黄下作法

安蒔繪に全地面を作るに石黄を以て下地をなすものがある左の通り研ぎ立て下塗の上に入漆、若しくは入漆中に蠟色漆を少し混合せる褐色の漆にて薄く塗り、其乾きの來らんとする際、即ち吐息を受くる頃に石黄を綿にて磨くが如くに擦りつけて乾燥せしむ、然して乾きし時其表面を右同様の漆にて同様に薄く塗る時は繪具中に吸入して表面僅に漆濕を止むるものなれば、是れに平極若しくは半ダン消粉等の金銀粉を綿にてスリ付けるものである、此法は高一蒔繪、トン／＼サビ上蒔繪にも書紋上に應用さるゝ事あるものである、

(24) 沃懸作法

古來沃懸地と稱する者は、主として光悦光琳等の製作せる金地の如きものを云へるが如く又現今にては此等を稱して磨き立てと云ふ、

其製作法は先づ繪漆にて地溜をなし殆ど今の極微塵粉に似たる粉を用ひ毛棒にて蒔き其乾きたる後スリ漆をなし通常なれば炭仕立になすべきものを只ドゥズリ磨きとなし光澤あらしむる者である、



現時の沃懸は器物の木端箱類の合せ口の如き箇所の金銀地となせる者の通稱である、然して此の如きイツカケをなすの方法は平蒔繪をなすと同じく其箇所を薄く繪漆を塗り粉蒔して仕立上る者である(但し粉は余り荒きものを用ひず)安物に於けるイツカケは、通常イツカケ漆を指頭に附け、然して箇所を撫で漆に濕しを與へ其少し乾きかゝりし處に消粉を綿蒔きとなすものである、

(25) 螺鈿嵌法、

螺鈿嵌法は、蒔繪仕上後に嵌入するものにて現今美術的製品に行はるゝ法である、螺鈿嵌法は維新以後専ら行はるゝ處の者にて所謂芝山鑲嵌と稱せらるゝ所のものである、此等は描金家のなすべき者ならずして別に専門家あるものなれど現今は蒔繪師も行ふものあるに至つたのである、

其作法は、始め所要の貝、象牙、類に下繪を寫し之を金工用糸鋸を以て大体を引き取り金工用鑪を以て其輪郭を削りて正確に作り然る後彫刻刀(刃を急に作る)を以て肉取りを削り作るものである、貝は皆厚きものを使用す

昔は貝は厚きを用ひ多くは下地中に塗り込みたるが今は芝山鑲嵌法を除くの外は多く薄き者を用ひて下塗に貼附するを常とす然し貝は厚き丈け奥深き光澤ある者なれば此薄貝にて製作せる者は大に古來の者に劣れるものである、又厚き貝は麥漆にて附着せしめ、薄き者は膠汁を用ふ、麥漆にて付けし者は、久しきに堪ゆれど膠汁の者は、然らず是れ亦薄貝製の厚貝製に劣る所以である、然し蠟色漆の中に膠汁を入れ其ものにて張ばれ幾分其点を補ふ事を得るものである、

厚貝は花紋を切るに鑪を用ふれど、極薄き貝は針又は鉄にて切る事を得、厚貝の花紋は下地に彫込附着せしめし後中塗上塗等をなし、然して後金地にも蠟色地にも仕上る者なれど薄貝は貼り付け終らば直ちに地蒔をなし若しくは地溜をなす者である、鉛を附着せしむるも亦貝の貼付と異なる事なし、又稍厚き貝及鉛等を貼付するには大抵麥漆を用ふる者である、光琳の作品の如き大抵皆麥漆付である、以上にて蒔繪製作の大意は盡せり然し蒔繪は千種萬別一々之が説明を加ふれば僅に數十の紙數にて完了し難し、然し前述の外更に異りたる製作法あるに非ず、即ち夫れ等の方法二三を併用し或は三四を合し彼を取り之を用ひ相合して一物をなせるに依り其結果數十種の差異を生ずるに至る者故前述の諸法を熟讀含味し大に工夫せねばならぬ、

金粉散布量目表、

梨子地 (二寸平方)	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付
鹿之子	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付
中蒔梨子地 (全上)	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付
置平日 (一寸平方)	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付
蒔平日 (全上)	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付	大 濃蒔 一分付



切 金(全) 上) 本根朱 六厘付、花九厘付、中根朱 四厘付、未甚七厘五毛付、本根朱砂子置キ 常一厘付、薄朱 荒極六厘付

金粉之部

金粉 (二寸二分平方ニ付)

平極溜み 七厘付、半段全 五厘五毛付、金消全 五厘付、

銀消全 二厘五毛付、

金粉 (一寸平方ニ付キ)

荒常金地 一分八厘付、並常金地 八厘付、花子全 七厘付、

微塵全 七厘付、荒極全 七厘付、並極全 六厘付、

小判荒極全 六厘五毛付、銀極地 三厘付、

金粉中蒔之部

金粉 (一寸平方ニ付キ)

荒常 三厘付、並常 二厘付、花子 二厘付、微塵淡蒔 二厘付、

平目淡蒔 (一寸平方ニ付キ) 大二全 一厘五毛付、大三全 三厘五毛付、

常三全 二厘付、小三全 三厘付、先キ全 二厘付、

平目打チ 二厘付、花子淡蒔 五厘付、金石目地 七厘付、銀石目地 五厘付、

特種なる蒔繪作法、

漆器寫真蒔繪法、

本法は漆器面に寫真繪を現はすものにてオーベルネツタル氏感光劑を應用し寫真繪を現はしたる一種の膜を作り之を中途したる器物に貼付し仕上げをなすものである、清淨なる硝子板を取り之を沈降炭酸石灰にて能く拭ひ後、アルコール或はエーテルにて能く洗ひたる後、左の調合藥を其硝子板上滴下し之を左右上下に傾けて平に流し、其溶液の余分を瓶に戻し入れ、之を暗所にて乾かす(炭火を用ひて乾かす)

感光劑の割合……デキストリン四瓦、白糖四瓦、屈里斯林二乃至八瓦、重クロム酸アン

モニア二瓦、アンモニア少許、純水九十六瓦、

直接中途研したる器物面に塗布すべき感光劑の割合……ゼラチン四瓦、白糖二瓦、

屈里斯林少許、重クロム酸アンモニア二瓦、純水五十瓦、

次に此藥布面と寫真種板の藥布面とを合せて之を日光に正しく向け五分間程焼き之を暗所に持行き取離し呼吸を吹掛くる時は種板の透明なる部分のみは日光を透過し藥品乾固となれども不透明の部分のみは、粘質を帯ぶに依り可成微細の銀其他の粉を蒔く時は光線不透過部分のみに附着する故、一種の寫真繪を生ずるものである、

寫真繪を硝子板上に取りたる場合には其表面の一方より平均にコロジオン液を流し自然に乾かし、之を水中に挿入すれば、コロジオン膜は、粉を附着せる儘剝れて水中に浮ぶものである、依て之を貼付せんとする漆器面に薄く膠を布き(低温にて溶けざる膠を用ふ)之を水中に入れて膜を貼付する、(此際多少皺を生ずるも乾くに從ひ平坦に復す)貼付し了らば



コロチオン膜を被れる故此に点火して膜のみを焼失せしめ其上に透漆又はワニスを塗り仕上るものである、

全別法、

前法に於ける寫真蒔繪の感光劑は氣候の乾濕に依りて其作用に變化を來し往々失敗に歸する事あり、又水く貯へ置く時は感光性を失ふ故に甚だ不便なりしが左の調劑を用ふる時は是等の缺點を補ふのみならず不熟練の者にも容易に之を行ふ事を得、工程に於ては前法と同様である、

感光劑の割合………

甲	魚膠	一、〇〇	乙	重クロム酸アンモニア	一、〇〇
液	葡萄糖	四、〇〇	液	水	一〇、〇〇
水	アンモニア水	一〇、〇〇	水		

甲、乙各別に調合し置きて使用の時等分に加ふ

簡便蒔繪銅版製法、

此法は銅版を以て蒔繪を印刷する法にて電鑄に依り造りたる銅版も印刷蒔繪となし得れど、之れが製作には電池の設備を要し熟練者に非れば其完全なるものを製する事頗る難きものである、此に於てアスファルトの感光作用を應用して便宜なる銅版作法を行ふたのである、

(イ) 銅版面を木炭及油砥粉にて平滑に研磨し、然る後依的兒、炭酸石灰を以て其面を十分に磨き清淨ならしめ

(ロ) 之にアスファルトの溶液を全面に流しかけて薄く塗布し(此時刷毛を用ひてはならぬ刷毛目又は埃粒を生ずる故である)暗室に於て之を乾し置き(アスファルト液調合法……精製アスファルト、三、ベンゾール七、ラベンダー油一二滴)

(ハ) 此銅版と同大なる硝子板面に墨にて適宜の書畫を描く

(ニ) 右の書面と銅版の塗面とを組合はして日光に曝すこと晴天凡六七時間、然る時はアスハルト全面は感光酸化して不溶性となり書の部分のみ墨色の爲めに光線を遮られて感光せぬ故テレピン油にて其面を徐々に拭ふ時は書の部分のみ溶解して銅面を現はし他面は其儘アスファルトを存す

(ホ) 茲に到て稀薄なる第二鹽化鉄の溶液を刷毛又は筆にて徐々浸漬するときは、銅面は次第に腐蝕して凹版を生ずる故適當の度に至りて之を止む、

(ヘ) 然して尙ほ葉節(即ち毛打ち)の如き或部分のみ一層凹くする必要ある場合には、其腐蝕せられたる葉面をバラヒンにて薄く塗り置き、針の尖端にて尙ほ適宜に細く描き之を前の如く第二鹽化鉄にて腐蝕せしめる

(ト) 次にアスファルト面に微温を與へて、テレピン油又はベンゾールを布片に附して堅く拭ふ時はアスファルト漸次に溶解して除去する事を得るものである、是れ即ち漆工用の銅版にて濃淡自在普通平蒔繪と異ならざるものである、

之を漆器蒔繪として器物に印刷するには通常銅版印刷法と全様其面に漆を塗布し後凸部を拭ひ去り薄紙を其上に載せて羅紗切れにて紙上を覆ひ、木製ロールを通過せしむる時は漆は紙面に附着する故、之を所要の器物に寫し其上へ普通蒔繪法の如く金屬粉を撒布するの



である、

### 高蒔繪簡易製作法、

- (1)、蒔繪模様を有する原型の作成………原型は金屬彫刻物或は木彫物にても能けれど便利なるは左の三種である、  
 常法にて製作されたる高蒔繪、彫刻附石膏型、(精密なる肉合のものに適す)油土型(細密のものに合せざるも如何なる圖様にても作成し得)
- (2)、原型より雌型の製作………石膏、モデリングゴム、金屬等を用ふ、此中石膏最も宜しけれど使用中磨損する故豫め摺漆を型面に施し堅牢とすること必要である、モデリングゴムは湯に浸漬して簡單に型を塑成し得れど大形のものには不便である、故に小形のもののみに適する、金屬製は原型高價なる故製産多數のものに使用さる、
- (3)、餅即ち高蒔繪肉層材料の製造………漆汁に二酸化滿俺等を混合したるものにて一例を擧ぐれば

生漆 一〇〇、 二酸化滿俺若くは酸化鉛 六——一〇

硫酸石灰 一四〇——二〇〇 麥粉或は其他の澱粉 六〇——八〇

膠溶液 三%又は酪素溶液八% 五〇——七〇 滑石若くは雲母四〇——六〇

此材料を混和するには先づ膠溶液、酪素溶液、生漆、以外の材料を乳鉢其他適宜のものにて均一に混合し之に膠又は酪素の溶液を徐々に加へたる後、生漆を混和し、此ものを平盤上にて木製の丸棒にて反覆練り展し均齊なる餅状とする、此際滑石又は雲母粉末を散布して粘力を適度に調節しながら盤及び棒に材料の附着を防止する、

- (4)、展し餅面に模様の押印………前記の如くして所定の薄層を得れば全面に滑石又は雲母を散布し雌型にて押印す、此際薄層の裏面にアラビヤゴムを引ききたる薄紙を水貼りとし置き其上より押印する、高肉のものは、押印中滑石又は雲母を散布して原型に附着するを防止する、押印後雌型を取り去り模様層を剥き取り硝子板に移すものである、
- (5)、漆器面に展し餅の貼附………硝子板上に數時間放置し乾燥劑の力によりて内外同様に乾固してゴム状となるを俟ち模様の輪廓より精確に切り取り裏面を濕ひたる綿にて軽く拭ふときは紙は容易に剝離する、此際裏面に附着せる過剰の雲母或は滑石を除去し半田漆にて漆器面に貼附裏面より綿にて押へ密着せしめる、

- (6)、仕上………模様乾けば、高蒔繪の基礎なる高低隨意の肉層を得、故に炭研きを行ひ、(消粉、平極等を用ふる場合には更に高蒔繪漆其他の漆にて描き炭研す)常法の如く地書きをなし金銀粉類を蒔くときは容易に各種の高蒔繪を作製し得るものである、  
 型紙應用凹凸模様作法、

所要の捺染紙を暫く水に浸して後其水氣を拭ひ去り、之を中塗面に載せ、その上を篋にて唐の土、米糊を等分に混和し少許の食鹽を練和せるものを布展し、直に紙を取り離し、模様を乾燥せしめ、後全面に上塗をかけ風呂にて乾し研出せば前の塗抹料のみは剝離して凹模様を殘留する故、朱合漆を引き金箔を貼付しその表面を掃去れば、沈金模様を生ずるものである、他は之に準じて行ふ、  
 型紙應用凸模様を作らんに、生漆に體質となるもの即ち唐の土、石黄の類を加へ尙は速に硬化せしむるを要する時は、乾燥劑(二酸化滿俺、重クロム酸加里の類)を之に混和し篋にて型紙上より布き乾かせば能し。



岡山工藝學校の創立は、明治二十一年に於て、岡山府内山田郡内山町の山田村に於て、岡山府立第一高等學校の附屬として、岡山工藝學校として創立せられた。其の創立の趣意は、當時の工業の發達と共に、工業技術者の養成に在りしに在り。其の創立の経緯は、岡山府立第一高等學校の校長岡田謙吉氏の苦心經營の結果として、岡山府立第一高等學校の附屬として、岡山工藝學校として創立せられた。其の創立の趣意は、當時の工業の發達と共に、工業技術者の養成に在りしに在り。其の創立の経緯は、岡山府立第一高等學校の校長岡田謙吉氏の苦心經營の結果として、岡山府立第一高等學校の附屬として、岡山工藝學校として創立せられた。

大正十一年九月三日印刷  
大正十一年九月十八日發行

(非賣品)

編纂者 岡山工藝學校内  
兼發行人 福田淡

發行所 岡山工藝學校  
岡山縣岡山市船頭町百十二番地

印刷人 青葉定吉  
岡山縣岡山市内山下三十六番地

印刷所 吉備印刷所  
岡山縣岡山市内山下三十六番地  
電話六〇六番



322  
328

大  
水  
...

...



終

